
VITAL・CHAIN ～天魔ノ飛翔～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VITAL・CHAIN 　　く天魔ノ飛翔く

【Nコード】

N6820E

【作者名】

雨月

【あらすじ】

それが冗談だと信じていた現実主義者の坂風義人。しかし、それは事実だった！？嘘と虚栄、信頼の話。

ブローグ／第一話：我俤天使　レオクレア！（前書き）

義人「ども、皆さん坂尻義人です。物語内部じゃあまり自己紹介してないんでここでよく理解してもらうために自己紹介を……………え？時間切れ？嘘！俺まだはなしたりな……………」

プロローグ／第一話：我儚天使 レオクレア！

古い二本の映画みたいに縦線がたまにはいるような映像。そこに映っているのは切り立った崖と黒い夜空に紅い月……そして、髪をなびかせる女性。

女性はこちらに興味がないのか気がついていないかのどちらかとうかはわからない。時折吹く風に美しい長髪を遊ばせ、紅い月を眺めている……と、彼女はこちらを向く。その目は紅かった。夜空に浮かんでいる月を溶かしているような色だ。

「……………」

ノイズが邪魔し、彼女が言った事が聞き取れなかった。彼女がしゃべるたび、この世界が動くたび、その声は、その音は……ノイズに邪魔されて聞き取ることが出来ない。

彼女はこちらが聞こえていないというのを知ったのか、こちらへと近づいてこようとするのだが………彼女はこちらに来ることができない。どうやら、こちらが彼女から逃げているようだ。

彼女の顔が絶望に変わる。

こちらはとうとう女性を見ることがなく振り返ると、山道を一目散に逃げ始める。途中、振り返るが、彼女が追ってくる気配どころか彼女の姿はあの切り立った崖から姿を消していた。

これはバッドエンド……………

プロローグ、

世の中には天使と悪魔がいる。何を言っているんだ？という人もいるかもしれないが信じない人は別に信じなくてもいいし、信じた人は信じてくれてかまわない。所詮は誰かの妄言だから。でも、その妄言を確かめた人はこれまで一人もいない。

白色の天使は黒色の悪魔を倒そうと考えた。

白色がこの世界のすべてだと思ったからだ。対して、黒色の悪魔はそんな天使に対して消極的というか攻撃してきた天使にたいして復讐などをしていたが天使が攻撃しないならば彼らも攻撃をしなかった。無駄な争いが嫌いだからではない、面倒だからだ。彼らは互角の能力を持ち、ただ白か黒かという色だけの関係だった。

それに、永い時の間で紅色が加わった。

五分五分の勢力を所有している白と黒に参戦して彼らは両方の色を徐々に消そうとしていたのだが共通の敵として認識されてしまった紅がパレットから消えてしまう日は遅くなかった。紅はほぼ、なくなったのだが存在自体が濃い紅を倒すのに白と黒が払った犠牲は多かった。白と黒の勢力争いはやんでしまい、紅ももう自ら何かをするというようなことはしなくなった。

それから数年が過ぎた。

一、

ここに、一人の青年がいる。十七歳にもなればもう青年と言ってもいいだろう。

「ぶう……………はあ……………」

彼は今、一生懸命ため息を吐き出し続けた。彼の名前を坂風義人という。学業の面で問題があるわけでもない。

「どうしたの？馬鹿な義人が悩むなんて珍しいじゃない？」

隣から顔を覗き込んできたのは彼の幼馴染である少女だった。結構顔が可愛いのだが、口が悪いことで有名で残念なことに彼はまだいない。さっぱりとした性格でどちらかというと女子の方々に人気がある。

「……………失礼な。僕は馬鹿じゃないぞ」

「馬鹿は馬鹿でしょ？」

「……………ふん」

そっぽを向いたはいいのだが、彼はそれでも再びため息をはいた。

「義人、それなら……………」

ここで、放送が入った。

『……………二年七組、坂皿義人君、お父さんが見えです』

義人は立ち上がったため息を一つ吐くとその場を後にしたのだった。

「お、やつときたな？」

「父さん……………何？学校まで来るほどの用事って何かあった？」

笑えない話だろうと義人はすぐに考えた。この父親が持つてくるものは大抵、面倒なものだった。意味不明なぐちゃぐちゃとした生命体をペットだといって飼おうとしたり、みると呪われるといわれているビデオを見せられたりもした。

「……………なんと！お前の婚約者が決まったぞ！！」

「……………どうせ、候補でしょ」

ため息一つ吐き出すと義人は聞き飽きたといわんばかりにそういつて下を向いた。

義人の父、驟雨がそんなことを言い出したのは一週間前ほどであった。

庭には謎の魔法陣が描かれ、中央には義人が小さい頃に使っていたズボンが置かれていたものだ。父いわく、あれはおびき寄せるえさのようなものらしい。ズボンで食いつく婚約者がいるとは到底思えない義人だったので世間の目もそれはあるから止めようとしたが暴走し始めた父を止める方法はもう一つしかなかった。

「母さん、父さんがまた変なことをし始めたよ！」

「そうねえ、困ったものねえ、驟雨にも……………」

ほとほと呆れたといわんばかりに義人の母、里奈はため息を一つはく。

「そんなもの、むしとりあみで捕まえられるでしょうに」

「！？」

母も何故かぶつとんだようなことを言っており、既に義人には理

解できなかった。

そして、今日に至る。

「さあ、今から家に帰って結婚式だ！」

息子の肩をがっちりつかむと父はさっさと連れて帰ったのだった。

車の中、父は相手が天使であることを告げた。

「……………あのね、父さん。父さんの頭の中には天使はいるかもしれないけどさ……………僕の頭の中には天使はいないんだよ」

超現実主義者の義人はお化け、妖怪、幽霊……………その他、存在が不確かなものを信じようとはしていない。よって、それに値するであろうと天使と悪魔の存在など否定しまくり出会った。

「おいおい、まったく……………事実を知らないお子様は……………まあ、いい。じゃ、いたら婚約者にするか？」

車の運転をしながら父はそんなことを義人に言った。勿論、そんなものをまったく信用しない義人は首をたてに振った。

「ああ、してもいいよ？大体父さん何歳だよ？天使だとか言っていると母さんに離婚されちゃうよ」

「よし、これで俺の勝ちだな」

父は一方的にそう告げるとそれで降何も言うことなく……………そんな父の後姿を見て義人は自分が成長したらこうにはなるまいと心に誓ったのだった。

結果を言ってしまうと、義人が間違っていた。

「あゝ契約に従って今日から坂風義人の妻になるレオクレア・ラミエールじゃ」

庭にあった魔法陣は七色の光を発していて中央の部分が影を落としており、その上には白い翼を生やした可愛い女の子が浮いていたのだった。

「……………父さん、これは何の冗談？」

未だに現実を目の当たりにしながら義人はかたくなに真実から目をそらすとばかりしていた。

「冗談？いいや、お前の賭け事の負けだろ？レオクレア、悪いけどよ……………白い翼を消して地面に降りてきてくれないか？そうしないところいつはなしもしねえぜ」

父がそういうとレオクレアは頷いて白い翼を消して、地面に降り立った。

「おっとっと……………あわっ！！」

「おっと」

地面に降りるのが苦手なのか着地時にふらふらとなるとそのまま義人の胸にうずくまるような形になった。

「あのさ、父さん……………この子……………何歳？」

自分の胸にうずくまったまま動かなくなった少女を放っておいていたのだがなんとなく年下に見えるので父に尋ねた。

「えっと……………確か……………」

「すとおぶじゃー！！」

言おうとした父の声をさえぎる声が聞こえてきた。気がつけば恨めしそうな顔をして父を睨みつけているレオクレア。

「女性に年齢を聞くのは失礼じゃろ？」

「おっと、そうだったな……………義人も気をつけるよ？レオクレアの奴はちよいと手に余るわがママ娘……………こほん、手を焼くほど可愛いからな」

じゃ、がんばれよと言って父は去っていった。

「え、ちよっと！ちよっとどどういうことだよ！」

自分より頭一個分ほど低いレオクレアのホールドは解けることなく、しかも力が強いのか離れることは出来なかった。

「なかなかじゃな」

「何がだよ……………君、天使って言ってたけど嘘だよね？」

縁側に座ってそんなことを緑茶を飲みながら隣に座っているのはどうみても黒髪黒い瞳ではない女の子だ。義人はため息をつきながらそんなことを聞いていた。

「失礼じゃな。わしは天使じゃ」

「天使はそんな口調じゃないと思うけど？」

彼の中での天使は大人の女性にあたる。義人は現実主義者にしてはどこかねじが外れているかもしれない。古臭くて幼い顔立ちが残るレオクレアの存在はどうしても受け入れがたかった。

「……………あのさ、本当に僕の婚約者になるの？」

「それは勿論じゃ……………ああ、気にするな。こんな身なりじゃ夜になったらすごいから」

「そうなの？ ぜんぜん胸なんて……………ちょっと、何言わせるの！ こほん、そんなことじゃなくて僕が言いたいのは君はそれでいいのかってこと。この際天使ってことはおいとくけどさ……………勝手に決められたんでしょ？ 僕の父に」

義人がそういうとレオクレアはうむむと唸った。

「そうじゃなあ……………そなたの父の坂尻驟雨はこっちの世界では有名人じゃからなあ……………それに、はじめはいやじゃったがそなたに、その、一目ぼれをした」

「……………」

強めがちの目がちらちらと義人の顔を見ながらそんなことを言うてきたので義人は絶句していた。

「じよ、冗談が好きなんだね？」

冷静な自分を取り戻すため彼はそう尋ねるがそういつた瞬間、むっとしたレオクレアの顔を見ることになった。

「冗談ではないぞ！ わしは嘘は言わん！」

「そ、そうなんだ……………」

断言されてこれは困ったことになったぞと彼は思った。レオクレアはどうみてもまだ幼い。下手したら小学校を卒業した程度だといわれても頷けるに違いないだろう。そんなのを婚約者にしたら社会の倫理を唱えられてしまう。

そんなことを考えていたらレオクレアがしたからのぞいてくる。

「どうしたのじゃ？」

「ん？いや……………な、なんでもないよ」

「何か隠しておるな……………わしに話してみよ」

なんとなくえらそうな態度だが、心の奥では心配してくれているのが見える。義人はそういった態度をする相手に弱かったりもする。「え、えつとね……………ぼ、僕はどうみても僕と君が結婚したら問題になると思うんだけど……………」

ピシリ！！

そんな音が聞こえてきて、レオクレアの表情は笑ったまま固まった。そして、そのままレオクレアはたずねる。

「……………それは、わしとの結婚がいやということか？」

「いや、そうじゃないんだけどさ……………その、君の容姿があまりにも幼く見えるからさ」

ぷちん

何かが切れた。少なくとも、義人にはそう思えた。その瞬間、高圧的な力の場が完成したのか義人は動けなくなった。

「……………わしが幼いじゃと？」

不機嫌であることを体現しているレオクレアに義人は黙る一方だった。

「おこちやまじやと？ “ふぁみれす” に行ったら絶対に “おこさまらんち” を頼むと？ ほほう、義人、いい覚悟じゃな……………」

このままでは殺されるかもしれないと義人は素直に感じ取った。そして、ああ、思えば短かったが楽しい数十年だった。もうやりたいことは何もない……………いやいや、まだやりたいことはたくさんあるなと思ひ直した。

しかし、結果的に義人が殺されることはなかった。気がつけばレオクレアは義人の膝の上に乗っかっていてお茶をすすっていた。その姿

がさまになっっているのは彼女の言葉がおじいちゃんっぽいからだろう。

「まあ、あれじゃ……………初対面の者どもは絶対にそういうからな。それならば夜の姿を見せよう……………あと、三時間ほど待っておれ……………ああ、そうじゃな、それまで時間を潰すために町を案内してくれ」

ぶらいどを傷つけられたからなとレオクレアはそう言って義人は力なく頷くしかなかった。

午後五時五十九分。義人は電波時計を確認した。場所は彼の家の庭で、魔法陣の上にレオクレアは静かに立っていた。

「……………!？」

六時を指した瞬間、レオクレアは光を発し、次の瞬間にそこにいたのは……………

「どうじゃ？これでおぬしに身分相応な姿になったじゃろう？」

「……………」

そこにいたのはあの幼いレオクレアの面影をしつかりと残す美少女だった。

「ふむ、あまりの美貌に目が奪われたか？」

「う、うん……………」

義人がそういうとレオクレアは驚いたようにきょとんとした。

「……………まともにかえされるとは思わなかったな……………」

義人はじつと見ていたが途中で目が止まるところがあった。それは、胸だった。

「……………ここは成長しなかったんだね」

そういった義人の脳天にチョップが突き刺さった。

「……………義人よ、人間という生き物は時には本音を隠し通さねばならないときがあるそうじゃ。素直ないい子は長生きは出来んぞ？」

強気な瞳はいやな笑みを帯びており、義人は右手が突き刺さったまま静かに頷いたのだった。

「ごめん、気にしたんだね」

今度は左手のチョップが義人の顔面に突き刺さった。

「……………いらぬ同情じゃ。次は手加減せんからな？別にわしは気にしていない」

「ふあい……………おっしやる通りです」

突き刺さっていた左手を離してもらうと、義人はため息をついた。

「けどさ、本当にいいの？君みたいな人が僕の婚約者って……………」

「いいのじゃ、これはわしが決めたこと……………それにまだ……………」

レオクレアが言くと義人の母が立っていた。

「そうよ、まだ婚約者いるわよ？」

「母さん？いつのまに！？」

ぎよっとしている義人を無視して母は言ったのだった。

「さあ！私が虫取り網で取ってきた子を見てみなさい！！！！」

家の中から人影がゆらりと現れたのだった。

第二話：レオクレア&セルフ（前書き）

赤「我々、モテモテの男たちを一方的な私怨で恨みをはらすはーれ
むばすたゝず！」義人「うわ、変なのが出てきたな……………」赤「む
？君はもて男か？」義人「いえ、断じて違います……………」あ、あちら
のほうに美少女を二人連れていた人がいましたよ」赤「そうか……
…ありがとう、いくぞ、青と黄！」青&黄「了解！！」義人「
ふう、変な奴らが去っていったよかった」レオクレア「む、義人、
今変な連中がいなかったか？」義人「気のせいだよ」

第二話：レオクレア&セルフ

二：はーれむばすたゝず！！

赤

「我ら！」

青

「はーれむ」

黄

「ばすたゝず！！」

ここで後ろのところが爆発する。

赤

「女にモテル連中をこの世から！」

青

「根絶やしにするのが！」

黄

「我らの使命！！」

ここでいきなり町の場合に移行する。

赤

「早速いたぞ！」

青

「さすが、妬みだけはすごいリーダーだ！」

黄

「こんなに短時間で見つけるなんて！」

そこには両手に花の人物、A（天道時 時雨）がB（霜崎 亜美）とC（天道時 蕾）と歩いている。

赤

「喰らえ！」

青

「我らの！」

黄

「怨恨の一撃を……！」

ここで三人がそれぞれの武器をくつつけて三位一体の攻撃を仕掛ける。

赤、青、黄

「……なんでそんなにもてるんじゃああ……！」

時雨

「ぐわあああああ……！」

蕾

「ちよつと！兄様に何するのよ！」

どげしっ……！

青

「も、もつとお」

亜美

「時雨君に何してるのよっ……！」

ぼこっ……！

黄

「か、快感……！」

二人の攻撃にあい、青と黄がやられる。

赤

「く……やられてしまったか……！」

赤は一人で夕日にむかつて続く。次回、はーれむばすた……ず……！
「第五十七話！沈め！太陽！」

家の中から出てきたのは透けるような肌（実際に透けている）をした闇のような髪に引き込まれるような瞳の女の子だった。美少女、この一言に尽きる気がしないでもないが頭に被った虫あみがすべてを台無しにしてくれていた。ほっぺを膨らませてはいるが、それを入れても虫あみがすべてを壊している。

「……………へえ、なかなかいい男じゃない」

虫網をかぶった美少女がこちらへとやってきた。近づかれるだけで恐い雰囲気を受ける。

「え、あ、そ、まあ…………どうも」

義人はなんと返していいのかわからないのか意味不明なことを言おうとして色々とおかしいことになった。その表情に気を悪くしたのかレオクレアが義人を睨みつける。

「はつきりと答えるのだ、義人！！」

「ちゃ、ちゃんとかえしてるよ！」

そこでようやくレオクレアの存在に気がついたのか常闇を背負っている印象を受ける美少女は答えた。

「あらら、これはこれは…………我俤天使レオクレアじゃない？今度は人間に取り付いたわけ？」

むっとした表情のレオクレアは答える。

「ほう、ずいぶんと失礼なことを言うな、墮落悪魔セルフ…………いつ、わしが我俤だという噂がたつた？」

それに対して挑むような瞳に態度のセルフと呼ばれた悪魔。

「代々神様に仕えていた天使の家系のくせしてわがままのお嬢様だつて私は聞いたわよ？そんなものぐさがこの子の婚約者ですつて？笑わせてくれるわね、オホホホ…………」

口元に手を当ててセルフはそういう。

「おぬし…………よくもまあ、そんな白々しい口を…………わしがだまつておればいい気になりおつて……………」

「……………」

義人はどうせ口をつつこんだところであれだ、自分は役に立てないし、うるさいといわれるのが落ちだろうから黙ってお茶をすすっていた。まあ、この場合彼の判断が一番正しいと思われる。

「はいはい、喧嘩はそこまで！セルフも悪かったわね、気に入らなかつたら帰っていいわよ」

帰っていいわよの部分にはなんだか違うニュアンスがあつた気がしないでもないが、異世界だろうがお隣だろうがそれは帰るに違い

ない。些細な違いだ。ただ、距離と次元が違うだけと言っていいだろう。

セルフは犬歯をむき出しにしているレオクレアのことは放っておいて座っている義人に視線を合わせるとそれまでとは打って変わってにこりと笑っていった。

「……………はじめまして、義人。私の名前はセルフ・フリーデン。セルフって呼んでいいわ」
ときつ

「え、う、うん。僕の名前は坂風義人だから……………」

義人は一瞬見とれていたのだが慌てて返事をする。レオクレアはぶすつとした表情で言う。

「……………わしのときは“ときつ”という音が聞こえなかったな？」

答えに詰まる義人に対して答えるのはセルフ。にやつとして彼女は言った。

「そりやま、当然でしょ。私の場合はきちんと夜に挨拶したんだから。どうせ、おこちやまモードで姿を現したんでしょ？」

「うぐ……………ま、まあ確かにそうだが……………」

事实は素直に認めるところがいいところだろう。彼女の数少ないいいところの一つかもしれない。

「そっち系の趣味だとは思えないからね……………義人はそうね……………」

義人の顔にだんだんと顔を近づけていくセルフ。義人はぎよつとしながらも動けないでいた。そして、セルフが一瞬だけ、大人びた表情を見せる。

「……………！？」

義人はそれに驚き、その瞬間にセルフは義人から顔を離れた。

「うん、義人は大人のおねえさんが好きね」

「！？」

「ほ、本当か！？」

レオクレアはぎよつとしたように義人を見つめ、セルフは頷く。

「まあ、残念だけど……私たち二人じゃ彼の好みには少々難点があるわね……年齢食ってる割にはレオクレアも幼いし……」
「ほっとけ！」

レオクレアが言葉でそう答える。義人は心の中を見透かされたような気がしたがまあ、事実だからしょうがないかため息をついているところがあった。

「むう、それよりも……残念だがわしのほうが義人と早くであつたからのう。優先権はわしがさきじゃ」

「あら……まあ、どうせあなたじゃ義人に呆れられるだけだわ」腰に手を当ててにやりと笑うセルフに対抗心を見せるレオクレア。ただ一人、義人だけが会話から置いてけぼりを食らっているような気がしないでもない。彼の母親はとくにこの場から姿を消していた。

「ふふん、そう言つていられるのも今のうちじゃ！一週間で義人の心をわしがわしづかみできなかったら義人の前からさつてやるう！」

駄洒落が入っているかもしれないが気にしないでもらいたい。

「あらら、そんなこと言つていいの？我俤天使に何が出来るのかしら……いいわ、私も同じ条件で……そうね、ハンデとして隙を見て義人と一緒にいるだけで彼を落として……いえ、墮としてみせるわ」

目に炎が燃え上がる天使に対して黒い瞳を静かに燃やす悪魔。義人はこれから僕はどうなっていくのだろうかとか身の振り方を考えておいたほうがいいのかもしいと彼は思っていた。

しかし、どうせここで考えても意味ないか！と考え直して彼は言った。

「ま、まあとりあえず……」

「何じゃ？義人？申してみよ」

「何？義人？」

「とりあえずさ、家に入ろうか？近所の視線が痛いから」

気がつけば家の外から何事かと庭を眺めているご近所さんの姿があつたのだつた。

「ふう、風呂とはいいいものだな……………」

お風呂から上がってきたレオクレアをみて義人は頷く。

「そうだね、これにはいらないと僕は気持ち悪くてさ……………」

一日でも入らないと一日が終わらないような気がするよとぼそぼそと言っていた。

「ん？どうした？」

ちらちらとレオクレアをみていたのがばれたのだろう。レオクレアは義人に対して首をかしげた。

「い、いや……………」

義人は風呂上りの美少女を見たことがあまりなかったのだが、その姿がほてっていてなんとなく風呂に入る前と後では違ったように見えたのだ。（当然である）フリフリの白いパジャマがなんともまあ、かわいらしいこともあつたのだろう。

「ほほう、わしの色香に顔を真っ赤にそめておるのだな？」

しっかりと義人の心を読み取つたのだろう。レオクレアはにやりと笑うと義人へと一歩足を踏み出した……………」が、

「はい、ストップ！競争は明日からっていったのはそっちでしょ」

「ぬがっ！！」

いきなり横からレオクレアが一步踏み出した足にたいして足が伸ばされてきたかと思うとそれは意思を持ったかのようにレオクレアをこかした。

「せ、セルフ!？」

義人の目は釘付けになっていた。セルフが着ているのはおそらく、大きなワイシャツだけだ。

「あいたた……………」おい、セルフ……………」義人の目が釘付けになっておるぞ！おぬしこそ競争してゐるではないか！そういうのを“ふえあ”でないというのではないか!？」

鼻をさすりながらレオクレアは下からセルフを睨みつける。

「……………あのねえ、私は夜寝るときいつもこうだったでしょ？」

「……………そうだったな」

「勝手にみてるのは義人のほうよ。今夜、襲われちゃうかも！きや

」

片足上げて頬に手を当ててそんなことを言っているセルフを見て
義人はなんとか冷静になれた。そして、両親との話を思い出す。

それは、数十分前の話だった。

「えゝこれから緊急家族会議を開きたいと思います」

「いえゝ！！」

「

……………」

「あゝ時間がないので簡潔に言いますが、俺らが出る幕ではないと
のことなので最終的に二人が決めた一週間という限られた時間で嫁
を決定します。異論はないな？」

「まあ、義人がどんな選択をしても母さんは何も言わないわ」

「

……………」

「誰も何も言わないので、では、我々はこれから一週間の間去りま
す」

「久しぶりの夫婦水入らずね」

「じゃ、好きなようにしろよ」

「じゃ、元気にしてるのよ、義人」

これが、一方的な会話である。義人はその間ぐるぐるまきにされ
てガムテープを丁寧口にされていた。

「ふむ、わしが義人のお弁当を作るう。それで異論はないな？」

レオクレアがいきなりそんなことを言ってきて義人は回想から戻
ってきた。

「え？あ、お弁当作ってくれるんだ？」

「当たり前じゃ。おぬしの母上、父上がいらないのだからな。それと
も普段は義人が自分でお弁当を作っておるのか？」

たずねられた義人だったが首を振った。

「いいや、作れないよ」

「ふむ、任せておけ」

それに対してセルフはレオクレアにばれないように笑っている。

義人は不思議に思ったのだが黙っておいた。

「セルフも異論はないな？」

「ええ、ご自由に」

「わしらが仲良くお昼をともにしていても邪魔するでないぞ？」

「どうぞどうぞ、ご自由に」

何かを想像しているのだろう………彼女はおもしろくてたまらないといった具合ににやにやしっぱなしである。未だにレオクレアは気がついていないのか気にしているようなそぶりは見せなかった。
「……………」

義人としてはなにやらセルフが悪巧みを考えているような気がして気が気ではなかったのだが、ここで彼女に答えてもらったところで待っているのはレオクレア対セルフという今夜の新たなデスマッチが待っているだけだろうから口は閉じておいた。基本、事なかれ主義なのである。

「じゃ、ちよつと早いけどそろそろ寝ようかな……………」

明日から両親がいないのである。レオクレアがお弁当を作ってくれるといったのだが朝食を用意してくれているということまでは言ってくれていないので間違いなく彼女は朝食を作ってくれないであろう。

「さあ、義人、ともに同じ布団に肺って寝よう」

「うん、そうだね……………今の冗談だからね」

腕をつかまれたのだが義人はそれを放してもらい自室へと戻っていったのだった。

その日、義人は非日常な二人組みのことについてじっくりと考えることが出来た。結果、これはもう自分ではどうしようもないということがわかったのだった。つまり、黙認である。

「ま、どうにかなるよね」

義人はそういうと静かに目を閉じたのだった……。

かばっ！

静かになった義人の部屋の天井からそんな音が聞こえてきた。そこにいたのはなんと、レオクレアだった。屋根裏から義人の部屋にやってきてロープでゆっくりと義人の寝ているベッドへと覆いかぶさる予定だったのである。

「にししし……まさかわしが天井裏からやってくるとは予想もしておるまい！」

嬉しそうにそう呟いているレオクレア。確かに、そんなことをわざわざ考える奴はいないだろう。別に義人の部屋には鍵も罾もかけられてはいない。

次の日、義人は朝から絶叫することになる。

第三話：我俟天使レオクレア！ 終了（前書き）

義人「はあ……………さつきもまた見知らぬ怪人に襲い掛かれてしまった……………こほん、さて、そんなことより……………実はこの小説皆様にはじめに言っておかなくてはいけないことがありました。本当だったら前回にしゃべってたんですけどね。正義の味方？らしき人に声を翔られていたりしたので忘れていました。えゝじつは、今回までしかレオクレア、セルフは出てきません」レオクレア「ええっ！？わし、もう出番なくなるのか！？」義人「ええ、まあ……………さて、それを楽しみにして？今回も読んでください。変哲もない単なる学校の話ですが……………次回はきっと殺伐とするでしょう、多分」

第三話：我儚天使レオクレア！ 終了

三：戦隊物に出てくるような怪人

怪人A

「ひひっ！ここから先はいかさんぞ！通りたくば俺を倒して見せろ！」

時雨

「ていつ！！」

怪人A

「ぐはっ！！」

時雨

「な、何で学校帰りにこんなゲテモノ（頭にゴミ箱をつけて海老のような体をしてはいるがイカやタコの足がついている）が襲い掛かってくるんだ！？はっ！もしやこれは何かの予兆？僕、今日から世界を守る一年契約のヒーローに？てか、サブリーダーとかは？」

剣治

「とうっ！サブリーダー登場！」

時雨

「…………ごめん、冗談だったんだ。帰っていいよ」

剣治

「おいおい、時雨君……それはないだろ」

時雨

「どうせ、君の事を知っている人なんていないからさ」

剣治

「まあ、そうかもね」

そう言っている時雨と剣治に対して相手はぶつぶつと何か言っている。

怪人A

「モテ男め……………」

時雨

「……………怨恨かいつ！そんなことより正義の味方でも倒しなよ！」
そういつて時雨は最後に怪人Aを蹴っ飛ばしてさっさと帰ろうとする。

怪人A

「くそ……………もてるなんてゆるさね……………ベルジョン博士め……………
どうせならイケ面怪人にしてくれれば良かったのに……………無念」

目が覚めると目の前に美少女の顔があったという話は良くある。
僕の目の前にも昨日知り合った美少女の顔があった。

「や、やっとおきたか……………義人よ」

「うわあああああああああ！！？」

そこにいたのは腹部にロープを巻きつけて天井から降りてこようとしているレオクレアの姿があった。朝だからか姿は幼子の姿になっている。

「あ、朝から物凄いきこしかたしてくるね？」

顔が青ざめるほどがんばっていたのだろう。そこまでして起こしてくれなくても良かったのだが……………

「いや、昨日の夜に忍び込もうとしていたんだが……………ふむ、失敗か」

「ん？何か言った？」

「いいや、何も……………それより、朝食が出来ておるぞ」

鼻をくんくんさせながらレオクレアは僕にそんなことを言ってきた。

「へえ、作っててくれたんだ」

「まあ、日課じゃからな」

意外である。

「じゃ、食べてくるね」

「ま、待て！わしを助けてから朝食を食べに行くのじゃ！」

僕はロープを解いてあげてからレオクレアとともに朝食のにおい

がしてくる場所へと向かったのだった。

そこにはご飯と味噌汁、目玉焼きが置かれていた。どれも湯気が立っていて美味しそうである。

「へえ、美味しそうだね」

「ふ、まあな」

レオクレアがそんなことを言っていると、エプロン姿のセルフが現れた。

「な」にが『ふ、まあな』よ。これ作ったのは全部私でしょうに」
お玉を肩にぽんぽんと当ててそんなことを言っている。

「そ、そうなの？」

「……………」（口笛を吹いている）」

レオクレアをみるが、彼女が見ているのは斜め上のカレンダーだった。

「どう考えたってその姿じゃ料理なんて出来ないでしょ」

「た、確かに……………」

「む！た、確かにとは何じゃ！わしだって料理できるんじゃないよ、よおし！今日のお昼を楽しみにしているがよい！わしの実力をみせてやる！」

そんなことを言っただけで自分の席に座るレオクレア。エプロンをつけたままセルフが僕の前に座って三人でいただきますをすると朝食が始まったのだった。

「ふんふん、どれも美味しいねえ」

「当然じゃ」

何故、作ってもいないレオクレアが胸を張るのがわからないのだが、とりあえず料理は美味しかった。

「ありがとう、義人。まあ、料理は得意分野だから任せて」

セルフはそういったあと、箸を動かす手を止めてご飯粒が口の周りにについているレオクレアを吹いてあげていた。

「ほら、また……………」

「む、ご飯粒か……放っておけばいいものを」

その姿を見ていると子どもな妹レオクレアを助けてあげているよく出来た姉セルフにみえた。

「何じゃ、義人？」

「え、ああ……姉妹に見えてさ」

ふと思つたことを二人に言つた。そうすると、両方ともおかしそうな顔をした。

「そりゃそうよ、姉妹だもん」

「え？」

「わしが姉じゃ」

「！？」

正直、姉がレオクレアということに驚いた。

「なんじゃ？妹が姉の世話をするのは当然じゃろ？」

普通逆であろつ。

「ま、名前とか容姿とか、色々と義人がつつこみたいことはわかるけどね……今度また教えるわ。今、私たちに残された時間は少ないもの」

時計を指差す。そこにはあと三十分ほどで朝のHRが始まるというぎりぎりの時間を示していたのだつた。

滑り込みセーフがあるならば、滑り込みアウトもある。僕はセーフ。だけど……

「転校早々遅刻とは情けないわねレオクレア」

「む、転校曹操じゃと？猛将じゃな」

「いや、曹操なんだけどそっちの曹操じゃないから……それじゃ意味つたわないからね」

今の時間は休み時間。先ほど、先生がレオクレアとセルフの紹介をしていた。僕はそれを頬杖をつきながらみていた。

「あ、レオクレアじゃ。わしが困っているところを見た場合は率先して助けるように」

無駄にえらそうだ。いや、態度も自分がえらいと思ってるな。

「なあ、義人……俺、レオクレアさんの下僕になるわ」

「……勝手になれば」

そう言ってくる男子も少なからずいるということは認めねばなるまい。

「こほん、セルフといいます。私が困っているところを見かけた場合は出来るだけヒントだけを下さい。私は自力でやりますから」

最後に微笑んだ点でポイントが上がったのだろう。

「義人、俺……彼女と肩を並べて下校するよ」

「……そ、がんばって」

勝手に夕陽に向かって帰るがいいさといいたくなるようなことを言う人だっていた。つまり、この二人はレベルの高い美少女なのだろう。

そんなことがあったのだが、彼女たちの周りに男子生徒はいない……というより、いるのはいるのだがそれは僕だ。休み時間になつてすぐさま二人は僕を屋上に連れてきたというわけである。

「さて、義人よ……学校のことはすべておぬしに任せるぞ」

「へ？どういう意味？」

僕がそう尋ねるとセルフが答えを返してきた。

「……まあ、レオクレアがまともに学校生活を送れるとは思ってなかったけど。義人、席が隣だからレオクレアが授業中にわからないところがあったら教えてあげて」

そういつてセルフは僕の前から姿を消したのだった。

「まずは数学じゃったな？」

「……う、うん」

「期待しておるぞ 義人！」

「ご機嫌にレオクレアはさういうと屋上を後にする。

「……やれやれ、これからどうなるんだろ」

そういつても始まらないことを僕はそう言っていたのにあえて口にしてみた。屋上ではいたため息はそよ風に乗せられてどこかへ飛

んでいったのだった。

「ふう、義人のおかげでまずは好スタートじゃな」

「……………そりゃどうも」

レオクレアのおかげで僕の宿題が増えてしまった。

授業中、ほぼ僕にぴったりと引っ付いていたレオクレアは何度が注意されたのだが、そのたびに僕を見てくるのだ。

助けて欲しいと視線を送ってくるのはわかったのだが、その視線は僕らの間だけ伝わっていたようで、先生には当然のように伝わっていなかった。

先生には無理やり僕がレオクレアと机をくっつけているように見えただろう。だが、あいにく数学の先生は陰険で知られている先生で言葉で注意しても聞かない場合は勝手に宿題を出す。ちなみに、男子一人でも宿題を出されたらそのクラスの男子すべてにもれなく宿題が出されるという連帯保証機能付である。

「義人に断罪を！」

「聖なる肅清を！」

「彼女とのデートをキャンセルしないとイケないんだぞ！」

「吊るせ！」

「吊るせ！」

休み時間、僕は吊るされそうになったのだった。

「なあ、義人」

「何？」

「……………わしが言うことを一つだけ守って欲しい」

放課後、若干ぼろぼろな感じの僕にレオクレアは言った。

「絶対に、絶対に封筒が来てもそれをあけたら駄目だぞ」

「？わかったよ」

僕は次の日、この約束を破り、すべてを失ってしまう。

第四話：VITAL・CHAIN（前書き）

義人「さて、この話から本格的に始めました……………今思えば壮絶なプロローグ？だったと思います。ま、冗談はさておき、これからどういった話になるのか……………骨子案は検討中です」

第四話：VITAL・CHAIN

四：涙の出るような友情

時雨

「…………ふう、大丈夫か」

剣治

「どうしたんだい？そんなにおびえて……………」

時雨

「最近さ、なんだか変な色物連中に追いかけている気がするんだ」

剣治

「色物連中？メイドさんかい？」

時雨

「違う違う！戦隊物の格好してる三人と海産物の怪人みたいなの」

剣治

「あゝ、それって道の先にいるあの人じゃない？」

時雨

「！？」

赤

「また会ったな！」

青

「前はぼろ負けだったか」

黄色

「今回は負けない！」

怪人A

「お前を倒して我々が色男面いけめんフェイスになるのだ！」

決めポーズを決めている四人にすばやく近づいた時雨はその四人をあっさりと倒してしまった。

時雨

「これ以上近づくと警察、呼びますよ！」

剣治

「そうだね、そうしょうか」

二人は去っていき、動けるものは一人として四人の中にはいなかった。

（続く！）

それにあつてはいけない。

それを開けてはいけない。

それに触れてはいけない。

それを見捨ててはいけない。

それは異世界の扉、日常との別れ。

「ん？」

下足箱の中に入っていたのは大きな茶封筒だった。そして、上記の言葉が書かれている。

「これは……なんだろう？」

僕は当然のようにそれを触ったりしたのだが、あけてみることにした。へんなものだったら元に戻しておけばいいだろう。

僕は、それを、開けた。

VITAL・CHAIN　　天魔ノ飛翔

子どものころ、ガキ大将のような存在にいじめられたことはないだろうか？まあ、いじめっ子だった人にこの話をしてもわからないだろうが、いじめられたことがある人ならわかるだろう。それこそ、彼らは暇つぶしとしてそれを行っているときもある。ただ、都会から引越してきたただでからかつてきたりする。

「やゝい！紅目！」

僕の場合は目が紅かった、ただそれだけの理由で引越し早々相手方がからかってきた。人数は五人くらいでまあ、周りの連中は弱

そうだった。

「……………」

「おい、なんとかいえよ！」

「……………」
「血扇^{けっせん}！」

僕が右手を振ると彼らに紅い閃光のようなものが飛んでいき、彼らをなぎ倒していった。

「う、うわああああん」

「けっ、子どもが僕に話しかけるんじゃないよ、まったく……………」

この出来事が起こったのは今から十年ぐらい前……………小学校一年生ぐらいのころだろう。今となつてはいい思い出である。この時点で、見た目は子どもだったわけだが……………。

僕が今現在通っている高校の屋上には鍵があり、いけない。それは何故かというと、危険だからだそうだ。過去一度、この高校の屋上からあやまって飛び降りてしまった人がいるらしい。どういった状況で飛び降りてしまったのかわからないのだが、聞いた噂ではその人は夜な夜な屋上をさまよっているそうだ。

話が逸れてしまった……………。

僕がこの家にやってきたのは一週間ほど前だ。両親が海外に出張してしまい、僕だけ残されたのだが一人ではさすがに生活しきれないと思つたのだらう、両親は隣町に住んでいる親戚のもとへと僕をおいていった。

「ねえ、義人君何してるの？」

「本読んでるんだよ」

「へえ、何の本？」

「倫理」

「面白い？」

「まあまあ」

「ふ〜ん」

おじさんとおばさんが帰ってくるまでその家の娘である美咲ち

やんの相手をしてはいけけない。彼女は高校一年生で、僕の一歳年下である。何事にも興味を示すような性格なのか、はたまた静かなところが嫌いなのか知らないがこの一週間の間ずっと僕の近くににいる。そして、五分に一度は話しかけてくるのである。

さて、他人について説明ばかりしているのはどうかと思うので

……まあ、してないっちゃしてないんだけどね。

僕、坂尻義人について少々説明しておこう。

実際の年齢は………34歳といったほうがいいだろう。

以前、僕は信じてもらえないだろうが17歳まで生きて、とある日、その能力のまま赤ん坊となってしまった。

信じられるだろうか、この話が？よって、そのままの能力（頭脳、運動神経、趣味など）を引き継いだままなのだ。

簡単に言うとゲームで全クリした後にもう一度初めからでステータス引継ぎといった感じなのだがこれがまた、退屈だった。

赤ん坊の頃はとりあえず母さんに手のかからないように夜鳴きを控え、スプーンを右手で綺麗に持つと驚かれたので翌日からは左手で握ることにした。

これにより、実際の赤ん坊のような仕草を見せたのだ。

生まれた当初から始まったので抱き上げてくれた看護師さんに口が滑って『ありがとうございます』なんか言ってしまったらぎょっとしていた。これは失敗したと思っている。しゃべれる言葉は『ばぶ！』この一言だけで我慢して、育児の本（赤ん坊がどういった行動をするか知るため）を適当に読みつつ、他人より若干発育の遅い赤ん坊を演じていたのだった……………。

それ以降、夜鳴きもせずに母が昼飯を準備するまで買ってもらったクマ（これがまたリアルなクマのぬいぐるみだった）の耳を甘噛みするまねをしていたりもした。

「まあ、義人はいいい子ね〜」

ずっと、そういい続けられた子どもはまあ、そこまではないに違いない。だが、僕は十七歳の心を持っているのだ。お漏らしゼ口、

う　こも自分でやっていたのだ！正直言ってこれはもう赤ん坊のレベルでないということを両親が気がついていないことに驚いたのだが、僕としてはこれでよかったと思える。

まあ、その結果として……………両親は殆ど家にいなくなってしまう。つまり、手のかからなくなつた俺を放つておいても大丈夫だと認識したのかずつと仕事に行つたきりだったのだ。そのおかげで母さんと父さんは大忙しで、休日、僕は一人であることを練習していた。

二周目の特典かどうかは知らないが、波動を出せるようになったのである！

「ていつー！」

両親がいないとき、ずっとこれの練習をしてたのだ！僕は！そして、気がついたのだが…………

「こ、この能力って正直平和な世の中では必要ないのでは？」

四つんばいになって気がついたのだが、本当に必要がないのだ。ちよっかいを出してくる上級生とかそういうのに対しては勿論使っているが、一番威力の少ないもので撃退している。

右手、左手のどちらかを振って衝撃波を放つ“血扇”、若干強そうな相手には左手、左手のどちらかを勢い良く突き出して衝撃波と打撃を撃ち込む“血槍”^{けっそう}　まあ、他にも色々と応用技やらなにやらあるのだが……………そういった物騒なものを極力使うことなく僕は気がつけば高校二年生になっていたのである。

そして、前にも言ったとおり、美咲ちゃんの相手をしているだけに過ぎない。

「ねえ、何してるの？」

「読書……………」

今日もまた、そういったやり取りが行われる…………

事情が変わつたのは次の日からだった。

第五話：遅刻したトップアイドル！（前書き）

義人「えゝ今日からとうとう……あの方が消えてしまいました……
まあ、前座をやっていたような感じの人たちだったのですが、僕と
しては消えてもかまわなか……」時雨「……誰が消えたんだっ
て？」義人「！？」時雨「今度からはこっちでお世話になるよ」義
人「……さ、さて、今のところの予定では毎週土曜に更新したい
と思っていますが、メッセージなんかをもらえると嬉しいんでその
ときにも更新しようかなゝっておもってます」時雨「僕に対しての
ご意見、ご要望もよろしくお願いしたいとおもいます」義人「……
先輩、僕が主人公ですよ」

第五話：遅刻したトップアイドル！

五、

「やべえ！遅刻だ！！」

僕、坂風義人は確実に遅刻へのロンドを刻んでいたりする。まるでそれは螺旋階段を駆け下りる……否、転げ落ちるようなスピードで僕は自転車をこぎまくっている。

勿論、自動車波のスピードを出しているわけではないが誰かにぶつかってしまったえば大怪我を負わせてしまうのは間違いないだろう。

「！？」

「きゃ、きゃあああああ！？」

そして、事故ってしまった。

ぶっ壊れた自転車がゴミ捨て場の壁にめり込んで後輪が宙に浮いて力なくからからと回っている。

「……………あ、危なかった……………怪れない？」

「大丈夫です……………あたた……………」

しりもちをついてパンツを僕に見せている女子生徒をみるが、去年見たことがないような少女だった。どこかで見たことがある……………そんな気もしたのだが、今はそれどころではなかったが女子と話す機会はあるまりないので色々とたずねることにした。勿論、時間がないので急いでたつて学校へとともに向かいながら出発はしているのだが……………。

「あつと、同じ学校の子だね？」

制服を確認するが間違いなくこの制服はうちの女子生徒が着ている奴だ。

「えつと、昨日こつちに引越してきて転校してきたっす」

「成る程……………転校生？」

「そうつすね」

頷いてそういうが、続けて彼女は言った。

「ちょうど道がわからないところでしたからあなたにあつてよかつたす……名前は何なんていうすか？」

「僕？僕は坂尻義人だよ」

「成る程、私が年上だったら義人、タメだったら義人君、年下だったら義人先輩すね……何年生すか？」

「二年生だと相手に伝えると『それなら義人君決定すね』といった。

「君、そういえば名前、なんていうの？」

「え？私の名前知らないすか？」

驚いたような顔をする謎の相手。

「ごめん、知らない」

「うーん、結構がんばったって自分では思ってたんすけどね……島津プリンす。どすか？思い出したすか？」

名前がおかしいのは今の時代、良くあることだが……プリン……うーん、どこかで聞いたことあるんだけどな……。

「わかんない」

「道理で私を見てもサインしてくれとか握手してくれとか言つてこなかったすね……私の正体はっすね」

彼女が言おうとしていると、僕の背中に何かが直撃する。

「がはっ！」

「だ、大丈夫すか！？義人君！！」

「あははっ！直撃」。間抜けな義人にクリンヒット！

この声、そして相手を小ばかにしたこの調子……

「何だ、ミルフィじゃないか……まったく、朝から馬鹿やってる時間ないだろ？どうせ今日も遅刻だろうからね」

「何よ！あんたこそ朝っぱらから生意気にも女子生徒と仲良く登校しているなんておかしいじゃない？あんたの武勇伝聞いて近寄ってくる女子生徒がまだいるとは思ってなかったけどね」

相良ミルフィ。

お金持ちのとおこのお嬢さんで僕の幼馴染に当たる。

中学三年に入り、転校したのでこれでいじめられずにすむと思っていたのだが高校が同じであることに気がつき、一年のときは極力存在を隠していたのだが発見されておねしょしたこと、初恋が見事に失敗したことなどをことごとく披露。

さらにあることないこと適当なことを言いふらした挙句、僕は女子にもてなくなってしまった。

残念なことに男子は僕とミルフィが付き合っていると勘違いしており、生暖かい目で僕らを応援してくれていた。

バレンタインデーのときもミルフィはなんだかんだで『幼馴染だから』という理由でチョコをくれたりクリスマスするときも『あたし、夢はサンタだから』ということでプレゼントもくれる意外といい奴なのかもしれない。中学生のころは『Sの相良にSなのにMの坂尻』ってよく言われてたからな……勿論、そういった奴らは全部校舎裏でしめてやったさ

「って……あんだ、いつの間にアイドルと仲良しになったのよ？」

「ああ、成る程だからどつかで見たことがあるって思ったんだ……」

納得がいった。基本的に僕はニュースとかしか見てないからなあ。ドラマとかそういうの見てないし……知らなかった。

「へえ、ま、いいわ。どうせあんたみたいな男をトップアイドルが気にするわけないし……義人はありがたく、プリンを拝んでおくのね。じゃあね」

あつという間にミルフィは去っていった。一体、何がしたかったのだろうか？

「……相変わらず変わった人っすね」

「うん、そうだね……って、ミルフィのこと知ってるの？島津さん？」

「プリンでいいっすよ……そりゃまあ、アイドル同士っすから」

「嘘！？プリンは可愛いからわかるけどあのサディストミルフィが

アイドルだつて？そんなに皆彼女にぶたれたいのかな？」

彼女がふつてきた男の数はそれはもう、両手を使つても足りないし、両足使つても足りない。しかし、振られた連中は何かうれしそうな顔をしていたらしい………というのは『あんななんか付き合う気なんてないわ！』というミルフィのビンタが最高だ！という事情がある。

「あれ？義人君は知らなかったすか？アイドルつてこと」

「ぜんぜん。そんな前からアイドルだったのか………」

「いや、二年ぐらい前からすね。中学三年生のころす」

「ふゝん、まあ、別にミルフィのことはどうでもいいんだけどね………」

その瞬間、悪寒がした。そして、ついでにどこかでチャイムが鳴り響いたのだつた。

今日の遅刻者は二人！トップアイドルの島津プリンと学校内じゃ知らない奴は一人もないロリコン足フェチ盗撮マニアと噂の坂凧義人、この僕のことである。肩書きは勿論あのS相良ミルフィのせいであるが………。

「はあ、何でこんなことになったんだろう……… 自転車、壊れちゃつたし………」

「まあまあ、もう終わるつすから泣き言いったってしょうがないつすよ」

遅刻者は特別教室の掃除をしなくてはいけない！というのがこの学校の校則だつたりする。けどまあ、今回の遅刻者が二人で、珍しく普段から遅刻するような奴が早めに登校していたりした。その理由がどこから情報が漏れたのかトップアイドルの島津プリンが転校してくるというものだつたりするのだが……… 彼はこういった。

「畜生！せっかく島津プリンと二人つきりで特別教室を掃除するなんて……… 坂凧、今度決闘だ！！」

勿論、僕は軽く受け流したが周りの男子の静かな殺意が恐かった。

「先生！坂風が島津さんに襲い掛かると思われます！僕に監視をさせてください！！」

一人がそういうと近くの男子が手をあげる。

「駄目だ！貴様のほうがしそうだ！先生！俺をぜひと島津プリン防衛隊隊長に任命してください！」

がやがやと騒ぎまくって一時間目は授業どころではなかった。

「あゝあ、本当に昼間はついてなかったなあ……………」

「そうっすねゝ確かに色々といわれているようには見えてたっすけど、ミルフィに助けられたっすね？」

言われたことに僕は頷いた。いや、別に彼女がいつものように僕をコケにしに來ただけなのだが……………

『ねえ！皆知ってる？義人つてば島津プリンのことを知らなかったのよ！！！！アイドルによりも二次元の美少女ゲットに萌えてる……………そんな奴だったのよ！！！！』

結果、オタクという称号がついてしまった……………前世じゃこんな小うるさい幼馴染なんていなかったただけだな。どこでミスったんだろ？夕焼けを見ながら考えてみるが答えはでてこない。

「さ、終わったっすよ」

「ん？じゃ、帰ろうか？」

「そうっすね」

プリンとともに掃除道具を片付けて職員室に行くために扉を開ける。時刻はPM5：30だ。

「……………あれ？」

「どうしたの？」

先に飛び出たプリンが首をかしげる。

次に出てきた僕も動きを止めた。

特別教室に入ってまだ一時間もたっていない。

春先だからまだ日が沈むには早い時間帯のはずだったのだが、空は真っ暗、先ほどまで大きかった夕焼けは消えていたし、空には雲が出ていないが月も出ていない。きらめくお星様だって窓から僕らを

見下ろしてくれてはいなかった。だが、不思議と学校内部、プリンの顔などはしっかりと確認できたりする。

「これは……一体……何っすか？」

首をかしげるプリンに対して僕も当然首をかしげる。

「さあ？さっきまで夕焼けあつたよね？」

頷き、あたりをきよるきよるとしたりする。

「廊下にもたくさん人だかりが出来ていたっす。人の気配もすべて消えているし……一体全体、何がおこったん……！？」

プリンがぎょっとして廊下の奥を見る。僕も同じようにしてそちらのほうを見るが、別に何もなかった。

「どうしたの？」

「いや……人影が見えたような気がしたっすけどね……とりあえず、校舎を出たほうがいいような気がするっす。それになんか、とても肌寒いつす」

自分の肩を抱いて彼女はそんなことを言った。確かに、先ほどまでは冬物の学ランが暑いと思っていたのだが今はこのぐらいがちょうどいいと思われていた。

職員室にいくことなく僕らは急いで靴を履き替えて外に出ようとしたが……

「あれ？開かないっすね」

「ホントだ……」

鍵はかかっているのだが扉がびくともしない。けりを前面ガラス張りの扉に食らわせても割れないし、近くの窓に向かってかさをぶつけてみたのだがこちらも割れなかった。いつの間にかうちの学校は超硬度ガラスを使用する気になったのだろうか？こんなことする前に壊れたトイレを修理したほうがいいと思うのだが……

「閉じ込められた……っすね」

「やけに冷静だね……」

「ま、ここで騒いでも義人君の足手まといになるし、死ぬときはき

つと義人君と一緒にっす」

なんか普段聞いたら嬉しい言葉だがこの状況で言われてもあんまり嬉しくない。そして僕自身が冗談を考えている場合ではないということに気がついた。

「……………ちよつとどいてて」

右腕に力をこめる。なんとなく、“血扇”、“血槍”を使えばこの窓を壊せると思えたのだが……………その僕の腕をプリンが止めた。

「……………何をするかよくわからないっすけど、やめたほうがいいと思っつす」

「……………なんで？」

とりあえず右腕を下ろしてプリンの顔を見る。青ざめたような感じのプリンだったが、声はしっかりと誰もいない廊下に響き渡るほどの声で言った。

「……………ここは文字通り、“扉”っす。それで、義人君が何をするかわからなかったっすけどもしかしたら何かこの“扉”を開けるための“鍵”を出そうとしているっもおもったっすよ……………確かに扉を開ければ私たち二人はこの建物から出られるっす。けど、“扉”の向こうにいる連中もこっちに入ってくるっすことっす」

「え？“扉”の向こうって……………」

前面ガラス張りの扉を見るのだがあちらのほうに誰かがいるようには見えない。

「あくまで例えの話っす……………開ける、開けないは義人君の好きないようにしていいっすよ？けど、その前にもう一度おとなしくこの学校内を探索したほうがいいと思うっすよ……………どうっすか？」

プリンはどうやら僕に従うようだ。選択肢が出るとしたら

プリンの言葉は無視して窓を壊す

プリンの言葉を信じて校舎を調べる

こんなものだろうな。僕はプリンの言ったことを試すことにした。窓を壊してしまえばやはりあとで責められてしまうだろう。それに、直感的にだがプリンに従ったほうがいいように思われた。

「じゃ、ついでに学校内にどんなものがあるかも教えておくよ」

「ああ、それいいっすね。よろしくおねがいするっすよ」

こうして、僕はプリンに校舎内を案内することになったのだった。

音楽室、図書館、生物室に地下室、美術室や書道室などなど、たくさんの特別教室を紹介しておいた。校長室などもあったのだがこっちは必要ないだろうから無視しておいた。

「へえ、たくさんあるっすねえ」

「まあ、どこもそんなもんだろうけど……最後は屋上かな？」

ま、開いてないだろうけど……とは言わなかった。もしかしたら開いているかもしれない、そんな期待が僕の胸に宿ったからだ。

第六話：扉を開けるとそこは……………（前書き）

義人「えゝ前回、報告ミスというか、お知らせするのを忘れて増したが……更新日予定は土曜日というところまではいつていたとおもいます。それと、時間带的には夜七時ごろってところですね。では、今回もお楽しみ下さい」

第六話：扉を開けるとそこは……

六、

屋上、開いていないはずの扉はあっさりと開いた。

「あれ？」

「……………」

しかも、開いたと思って気がついてみたらそこは今の僕の部屋だった。

「やけに私物が散乱している屋上っすね？しかも、屋上なのに屋根があるし……………おや？ベッドの下に本が……………」

見られるといういろとやばそうだったので慌ててプリンの背中を叩く。

「な、なんかよくわからないけど僕の部屋に出たみたい」

時刻は六時を指していた。

「あれ？あっちには三十分もいたっすか……………とりあえず、義人君の部屋がゴールとなってたみたいっすね？」

「う、うんそうだね……………一体、あれはなんだったんだろう？」

首をかしげてさりげなくベッドの奥のほうに本を押し込む。勿論、ばれないようにさりげなく。

「何隠してるっすか？」

「ば、ばれてる……………」

「あ！エロ本っすね！？」

何をそんなに嬉しそうにしているのだろうか、このトップアイドルさんは……………

「あ、いや、これはね……………」

「いやあ、お昼に義人君は男が好きだって聞いたものっすからほっとしたっすよ」

誰だろっ、それを言った奴は？あとでボコボコにしておこう。

「プ、プリンさん？」

「何っすか？」

ニヤニヤしている……トップアイドルはにやにやなんてするの
だろうか……プリンを見て僕は頭を下げた。

「このことは内密にお願いします!!」

「うーん、そうっすね……考えてあげてもいいっすけど……それ
なら、今日のことは誰にも言わないって約束してくれるならいい
っすよ?」

「今日のこと?あの変な学校のこと?」

「そっす!」

嬉しそうに頷くプリンを見て僕はため息を一つついた。

「勿論だよ……これ以上変な奴だって思われたくないから」

「約束っすよ?」

いつの間にか僕の両手を掴んで顔をぐつと近づけて彼女は言った。

「わ、わかつてるよ……」

女子にこんなに顔を近づけられたのは初めてだったのでぎまぎ
してしまったのだが僕は敢えて冷静さを保って頷いたのだった。

その日、僕は夢を見ていた。

「ねえ、義人君……本当に厄介ごとに首をつっこむのがすきな
んだね?」

「そうよねえ、小さい頃から逃げればいいのに……自ら突き進むな
んでよっぽども馬鹿よね?」

なぜだろう、僕の知り合いたちが僕を馬鹿にしている。

「私が間違っつて障子を破いちゃったときも全然関係ない義人君がわ
ざと破ったってそういつて怒られたりしたし……」

「あたしが不良に絡まれたときだつてのこのこやってきて相手をボ
コボコにして停学を喰らったりしてさ……」

あれ?よかれと思ってやったのに何故怒っている様子なのだろう
か……

「「また、厄介ごとをつれてきたみたいだし」」

美咲ちゃんとミルフィが口をそろえてそういったところで目を覚ました。

「……………美咲ちゃんとミルフィが出てくるなんていやな夢見たな……」

「え？私が出たらいやな夢なの？」

「……………」

何故か彼女は僕の胸に座っている。うん、これは悪夢を見るね。

「ごめん、重……………ぐああああっ」

美咲ちゃんに対して重いという単語は禁止だったことを忘れていた。目が恐い。

「あ、ご、ごめん……………ごめんって！軽い！まるで美咲ちゃんは羽のよう！！フェザー？フェザー級……………あ、そういえば相撲にフェザー級ってあったっけ？……………ぎゃああああああ！！！」

何故か機嫌の悪い美咲ちゃんは僕を潰そうとがんばっていた。

一方的なランチを受け、朝食をとって僕はため息をついていた。

「ふう……………」

今日はこれから用事があるのである。今日は休みなのだが、昨日、ちよつとプリンが約束事を持ちかけてきたのである。

「あ、義人君、こちら辺の道詳しいっすよね？」

「ん、僕もこっちは引越してばかりなんだけど……………まあ、一応はわかるよ」

「校舎内も案内してもらったし、義人君の部屋の内部も案内してもらったつすから今度は町の案内をお願いしてもいいっすか？」

「うん、それはかまわないよ」

今頃学校では大騒ぎになっているかもしれないと地平線に沈み行く太陽を見ながら考えていた。

「じゃ、携帯のアドレスとか交換しておくっす」

「ん、わかった……………」

トップアイドルがこうも簡単に電話番号、メールアドレスなどを

教えていいんだろうか？そんなことを考えていると彼女は言った。

「どうせ、義人君には価値がない物だっておもわれるっす」

「え？」

「だって、私のことを知らないぐらいっすからね。それに私の携帯の電話帳、家族のものぐらいしかないっすよ。寂しいっすから義人君のを入れとくっす」

そう言っただけで交換終了し、さらに彼女は言った。

「明日、ちよっと付き合ってもらいたいっす」

付き合っただけで……そういわれた瞬間に心が天国に行ってしまったが、ああ、これはあした荷物もちをしてくれてといわれているんだと自分に言い聞かせた。

「ん、わかった」

「明日、迎えに来るからそれまでに用意をお願いしたいとおもっす……あ、義人くんって何だが言いづらいんでヨックンでいいっすか？」

「……呼びづらいかな？まあ、いいけどさ」

「そうっすか、じゃ、絶対に私のことを優先にして欲しいっす」

昨日はそれで別れたのだった。

部屋にいと美咲ちゃんが興奮した様子で入ってきた。

「よ、義人君！し、島津プリンがこの家にやってきたよ！！！！しかも！義人君のことを呼んでみたい！知り合いだったの！？」

ああ、そういうば昨日美咲ちゃんは部活にいていたから家にはいなかったんだっただな。ま、家に帰ってきて詳しく説明することしよう。

「ちよっす、覚えてくれて嬉しっすよ」

「……ま、約束してからね」

土日、基本はミルフイが僕を『あんたをパシリなさいって神様が言っただけ！だから付き合いなさい』といった感じでこき使うのだからこのまゝ携帯を変えていて送っていないので彼女はいらついているだろう。ま、そんなことはどうでもいいんだが……

「ヨックン、とりあえず文房具店とかそういったものがどこにあるのか教えて欲しいっす」

「ん……わかった」

文房具店へと向かう角を曲がる……

「ありゃ？」

「ん？」

何か、違和感を感じた。空が暗い、星が出てない、月がない！つて……昨日の二の舞なんじゃ……。

「ま、またっすか？」

隣のため息をついているプリンに同情したい。

「けどまあ、とりあえず一人じゃないんでよかったっす」

確かに、それはそうだろう。こんなところに一人でいたくないし、出来れば一人以上でもこの場にいたくない。

きよろきよろとあたりを見渡していたプリンが慌てて僕の後ろに隠れた。

「どうしたの？」

「あ、あそこに誰かいるっす！」

彼女が震えながら指差す方向に確かに人影があつた。よかった、なんだかとても危ない空間に来たのかとおもったんだけど人はいるようだ、一応。

「すみませ〜ん」

僕はなんとも思わずその人影に近づこうとしたが、プリンが後ろから止める。

「待つっすー！」

「え？何で？」

「ヨックン！よく見るっす！」

暗闇に目を凝らしてみると……

「ぎいやあああああああああああ！……！」

僕とプリンは二人して叫び声を出してその場を後にしたのだった。無論、転がるようにして逃げたのは間違いないが気がつけばプリン

を背負って僕は走っていた。あれ？僕だけ重労働しているような気がする。

「な、何あれ？」

「さ、さあ……………まさか頭から伊勢えびが生えてるとはおもわなかったっす」

いいや、プリンはそんなことを言っているがあれはそんな生易しいものじゃなかった。確かに首から上が人間ではなく海老だったのだが右胸のところからはトカゲが顔を出していたりもした。あれ、絶対に人間じゃないだろ？キメラ……………そう、そんな感じがした。しかも失敗作だとおもわれる。

「……………とりあえず、この変な世界の出口を探さないと」

「そ、そうっすね」

これ以上変なものを見る前にどこかに出ないといけない。今回、建物内部にいるわけではないので確実にプリンが言っていた話じゃ“扉”の向こう側にいるということになる。つまり、そろそろいるのだ、あんな連中が。

「……………なんか、巻き込んだみたいで悪いっすね」

「何に？」

「昨日と今日のこと実は初めてじゃないっす」

「……………」

走りながらそんなことを彼女は告白した。

「この世界、一体全体何なのかはわからないっすけど、とりあえず危ないってことはわかってるっす。まだこれで十回目っすけどはじめは夢の中しか見たことがなかったっすよ。けど、三回目はもう頭がおかしくなるかもって、毎日毎日眠れなくなって……………気がつけば何もかもがいやになってアイドルを辞めて学校も転校したっす……………昨日の朝、ヨックンに衝突されたときに重たい心が若干晴れた気がしたっすよ」

そつえばヘッドバッドをプリンに食らわせたような気がする。そのとき、移ったのだろうか、この世界が……………。

「あの世界、二回目のときは友達といたっすけど気がつけば自分ひとりでいたっすよ。けど、ヨックンとは違った……一緒にこれたっす。自分勝手だったけど……一緒にいればこっちの世界に連れ込めるって確信したっすよ……最悪っすね、私」

下を向いてそんなことを言う。

「……ま、まあ確かに最悪っちゃ最悪だけどね……それより、この世界から何とか抜け出さないと……もう十回目なら抜け出す方法知ってるんじゃない？ほら、しよげてる前にかれる方法を見つけてよう？」

僕よりあつちのほうが慣れっこだ。郷に入れば郷に従え……僕は素直に彼女の言うとおりにすることにした。

「……なんとなくだけど、学校内に入れば大丈夫だっっておもうっす」

「学校？」

「そうっす。この世界で一度出口を見つけてしまえばそこから出れるっすよ！外から始まっちゃったことは今日がはじめてっすけど建物内部のときは表の世界……普段生活しているほうの世界のことっす……そっちでは鍵などがあつて絶対に入れない場所の扉がゴールってことになってるっす」

成る程、だから普段は開いていない屋上が開いていたのか……僕らはいそいで学校へと向かうことにした。

「うわ！何あれ！？」

学校途中、道に魔法陣のようなものがひとりでに描かれていつて虹色に光りだす。

「……多分、さっきみたいな変なものを生成するものだとおもうっす」

「……どういうこと？」

「しかも敵意を感じるっす！あれが生まれる前に学校内に入らないとやばいかもしれないっす……！」

彼女の顔が青白く浮かび上がる。僕は慌てて彼女の手を掴むと校

庭を突破！いたるところに魔法陣が形成されている。

「っと……セーフ！！」

「あ、危なかったっすね」

何とか校舎内に滑り込んだ僕たちは息つく暇もないという調子でそのまま階段を駆け上がっていつて屋上の扉を開けたのだった。

第六話：扉を開けるとそこは……………（後書き）

ども、雨月です。雨月の作品で時雨君の存在を知ってくれているなら……じつは今のところ時雨君シリーズを新たに書いています。そのときはまあ、よろしく願います。

第七話…これっきり（前書き）

義人「えゝ今回で最後となりました……今思えばガッツが足りなかったな……こんしんのギャグを考えましたんでそっちもよろしく！あとかきのほうでは作者の今後の予定が少しだけ、わかります」

第七話：これっきり

七、

扉を開けるとそこは普通の屋上……以前は僕の部屋に直結していたとおもったのだが今回は今回でこれまた普通に出てしまった。

「……ここ、ほんとうになんなんすかね」

「さあ？それよりも……屋上から出ようにも出れないような気がしてならないんだけど……」

ガチャガチャとノブをひねっているのだが困ったことに屋上の扉は開いてはくれなかった。

「うーん、反抗期っすかね？」

「……扉に反抗期も何もないとおもうけどね……しょうがない、連絡して誰かに助けてもらおう……ん？」

よくよく見てみれば屋上の先っちょのほうには看板が立てかけられ、そこには次のような文字が書かれていた。

『……良くぞ現れた、勇者よ……そなたにはこの学校の地下迷宮に挑戦する権利を与えよう……ここにあるロープを掴むが良い』

「……なんだ？これ？」

「新手のいたずらっすかね？」

どこからどう見ても高校生が書いたとは思えないへたれた字に若干辟易したのだがこれはまた……どうしたことだろうか？プリンはまるで飛んで火にいる夏の虫のようにふらふらとそのロープに近づいていくと……

「い、いつでも大丈夫っすよね？」

え？何？そのいくならヨックンもいくっすよね？っていう表情……

……おいおいおい！！まずは自分の中にあるあの不思議迷宮をクリアすべきじゃないのか！？

ただ、心の中でおもっているだけでは人に伝わらないことも多々あるようで彼女はあっさりとロープを掴むと僕が静止することもない

く……………

こうして僕たちは再び別の世界へと旅立ったのであった。

）END（

「あ、今思いついたネタなんだけど……………」

「何っすか？聞いてあげるっすよ」

「……………遠藤さんがこういった……………これでえんどっ）END（！！！」
「……………」

第七話：これっきり（後書き）

さて、終わってしまいました……ですがまあ、今は別の小説を考えており、半ば六話分ほどたまっていきます。先に言っておきますが主人公はあの方、そう時雨君です。時雨君のファンの皆さん（いるんだろうか……）期待していてまっていてください！おっと、題名を言いそびれていましたが『夢の生まれる場所、心龍の目覚め』の予定です。メッセージなんかもらえると早くなるかもと考えていたりしててください。さて、そろそろ調子にのってしまう頃合なのでこれまで応援してくださった人たち……ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6820e/>

VITAL・CHAIN ～天魔ノ飛翔～

2010年10月8日15時27分発行